第５回 史跡米子城跡整備検討委員会

期日：令和元年１０月３０日（水）午前９時から
会場：米子市立山陰歴史館２階会議室・現地視察

１　委嘱状交付

２　文化振興課長挨拶

３　現地視察（９：１０～１０：３０）

４　議事（１０：３０～１２：００）

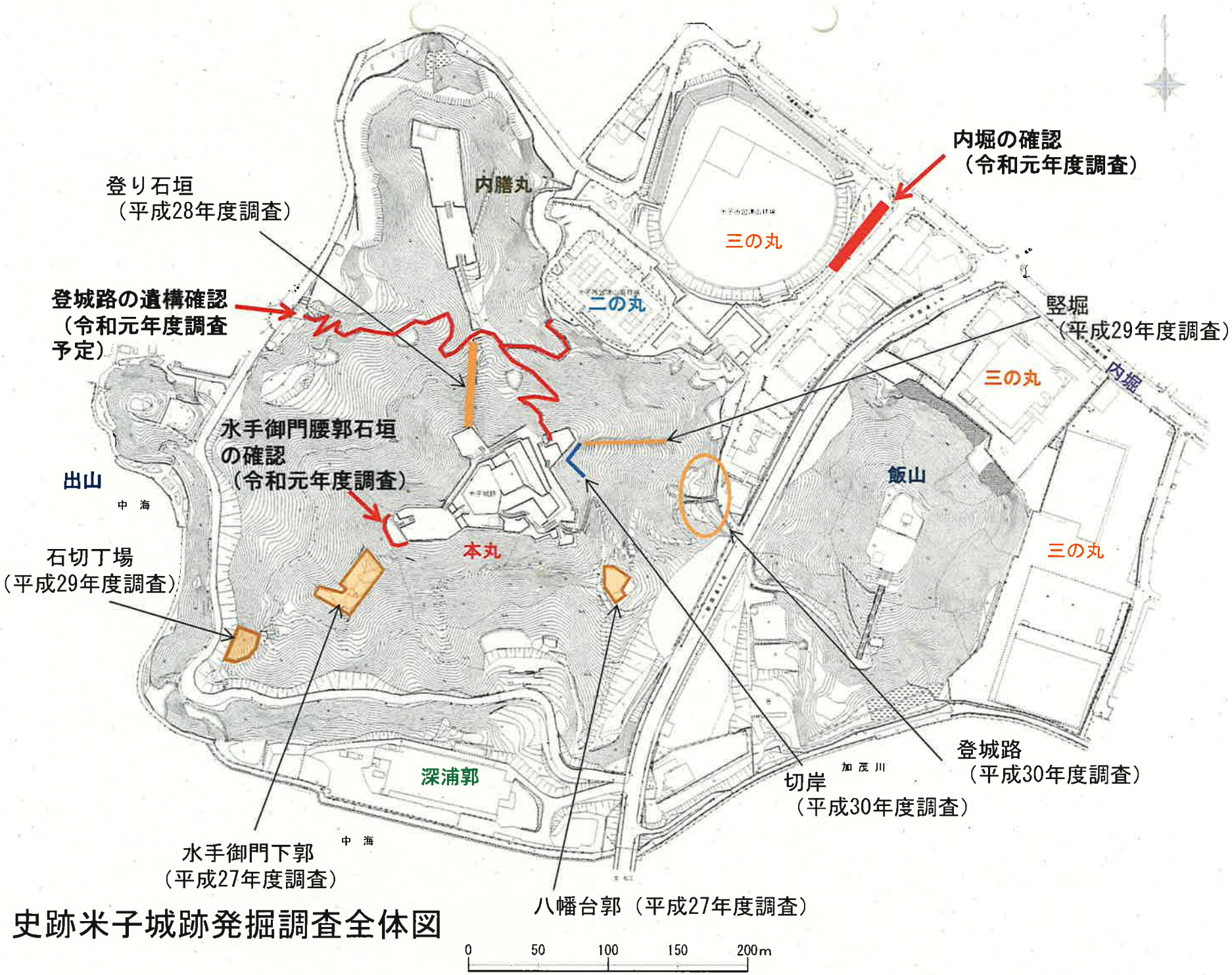
（１）委員長・副委員長の選出について

（２）今年度の整備事業について

（３）今後の整備予定について

５　事務連絡

６　その他



史跡米子城跡発掘調査全体図

令和元年１０月３０日（水）

史跡米子城跡水手御門腰郭遺構確認調査について

1. 今年度の調査目的

・水手御門の腰郭石垣の確認➡調査中

・水手御門虎口の石垣の確認（平虎口部分）➡予定

2. 調査の概要

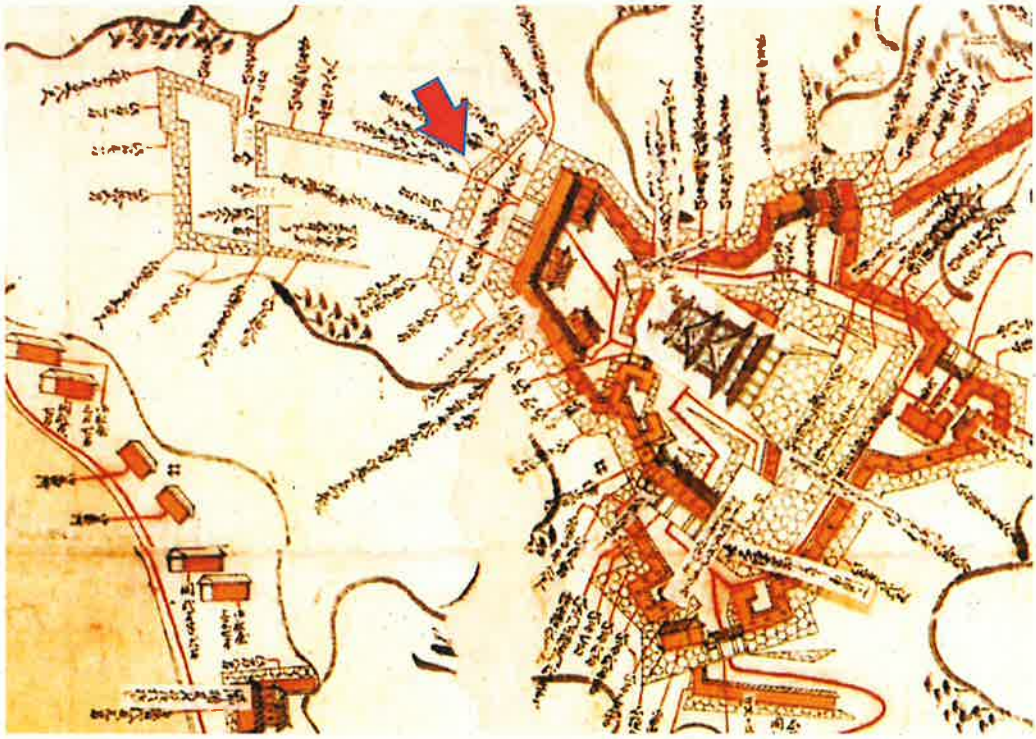
現在までの調査で、３本のトレンチ（Ｔ２５～２７）から水手御門腰郭を巡る石垣が確認されました。

石垣は地山ローム及び基盤岩をＬ字状に削平して積んでいます。根石から３段までは確認、それより上部は失われ、栗石が露出、崩落した築石は栗石と共に前面に転がった状態であり、その後補修はまったく行われていません。

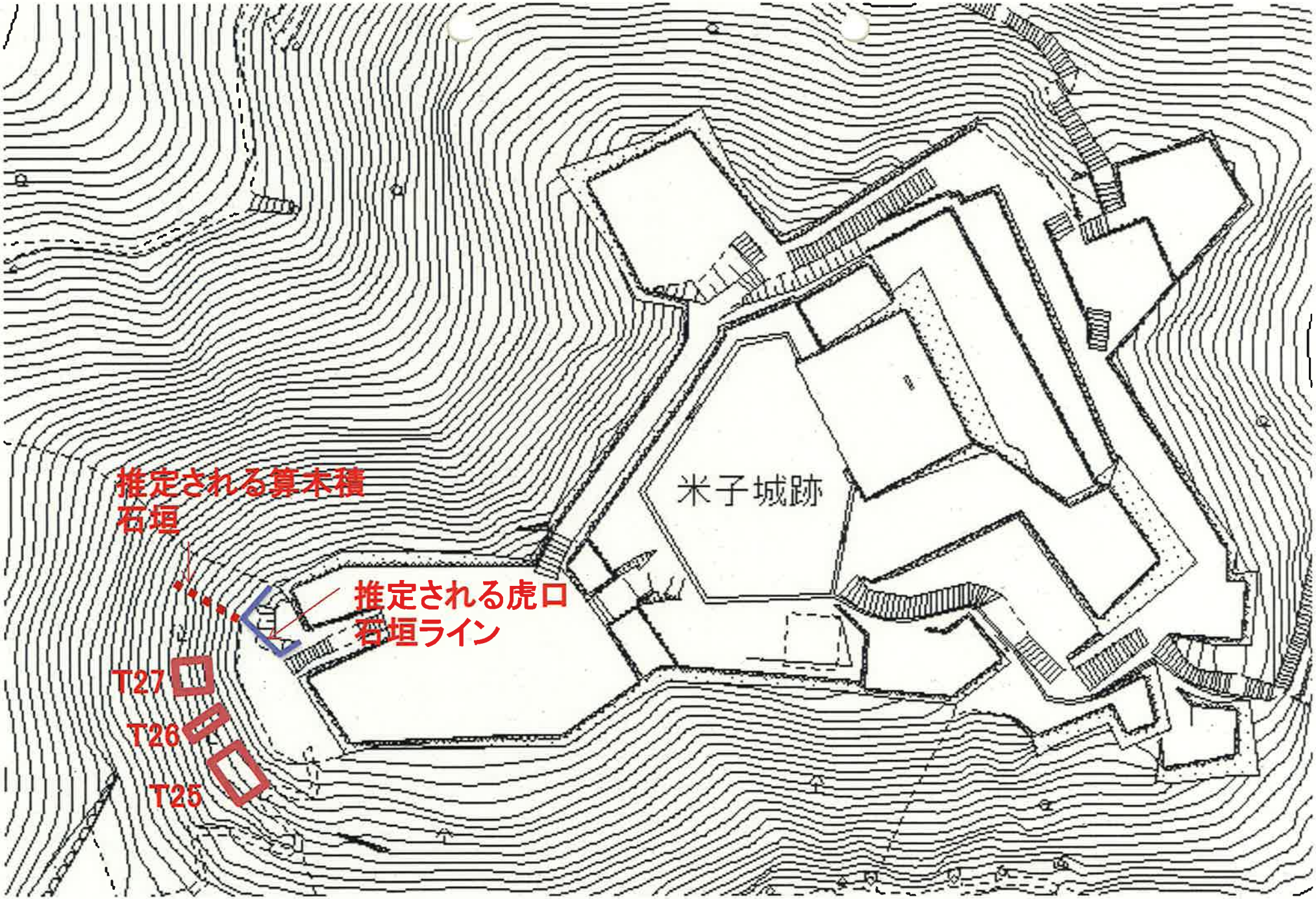
この腰郭については、元文４年（１７３９）の「米子御城明細図」に石垣が巡る郭として描かれていることがわかりました。Ｔ２７で検出された鎬積（しのぎつみ）の石垣はこの絵図に描かれているものと同じであり、絵図の信憑性を裏付けるものです。

石垣の積み方から、登り石垣や水手御門下郭と同時期に構築されたものと考えられますが、前面に転落した後に補修は行われていないことから、破城行為が行われたことが推察されます。前述の絵図を見ると、城内路はこの腰郭までで途切れていることから、ここから水手御門下郭に降りる道は破城以降閉塞されたものと考えられます。

今回の調査では、米子城跡の築城初期の姿から改変の様子を知ることができました。今後は東側の腰郭石垣と水手御門虎口の石垣の変遷を確認する予定です。



「米子御城明細図［元文４年（1739）］」に描かれた水手御門腰郭石垣（➡部分）



史跡米子城跡水手御門腰郭石垣確認調査状況（R1．10．6段階）

令和元年１０月３０日（水）

史跡米子城跡三の丸における遺構確認調査について

1. 今年度の調査目的

・三の丸内堀石垣の保存状況確認➡調査中

2. 絵図の調査

米子城跡の絵図は、近世前期のものは現存せず、近世後期以降のものが中心です。これらの現存する絵図を見ると、内堀と三ノ丸を隔てる空間に土塁と土塀が描かれており、さらに内堀との間に犬走状の平坦面が存在したことが窺えます。江戸末期の絵図では、犬走の幅が１丈尺(約 3m)と記載されています。

3. 調査の概要

堆積状況　三の丸側の内堀と犬走の推定地に、長さ 21m の調査区を設定しました。調査の結果、表土から 0.8m 下まで大正時代から昭和 30 年代に行われたグランド造成の土が堆積していました。この造成土の下は、調査区の南側で長さ 6.5m、高さ 0.5m ほどの範囲に明茶灰色の山土が残っていましたが、北側ではこの土が削平され、瓦礫を多く含む黒灰色の砂質土が堆積していました。出土した遺物から、この黒灰色の土が埋められた時期は、明治 20 年代以降と推測されます。

整地層　南側の山土からは遺物は出土しませんでしたが、明治時代に削平されていることから、江戸時代にまで遡る整地層の可能性が高いと思われます。また、この山土の上面に瓦と礫が堆積していましたが、検出した範囲が狭かったため、大型建物の基礎かどうかは判断できませんでした。排土置き場が確保できるようになってから、改めて調査する必要があると思われます。

硬化面　調査区の下層では、粗砂と粘土で構成される土が水平堆積していました。この上面は、硬化が明らかなことから整地層と見られます。硬化土の下は粗砂が水平堆積していますが、今回の調査では、この面で調査を止めています。過去に実施した城下町遺跡の調査では、この粗砂層は加茂川と法勝寺川の氾濫によってもたらされた洪水堆積層と推測されており、城下町では、この面の上位から弥生時代中期以降の遺跡が確認されています。ただし、今回の調査では、近世以前の遺物は出土していないため、城下町で確認されている粗砂と同じ砂かどうかは、まだ断定できていません。

石列　調査区の北側で長さ 4m の範囲に石列を確認しました。石列は一段のみで、石列の前面下には丸木を水平方向に置いた胴木が置かれています。江戸時代の記述では、内堀の深さは 4m 以上と推測されることから、今回検出した石列は江戸時代の石垣の基礎ではなく、明治 20 年代までの期間に設置されたものと推測されます。石列よりも北側は内堀の

堆積層で、粘土が主体のため、南側の粗砂層とは明らかに堆積状況が異なっていることから、少なくともこの石列から南側の粗砂層までの範囲に江戸時代の石垣があったと考えられます。今後、石列の一部を解体して更に下層の調査を行う予定です。

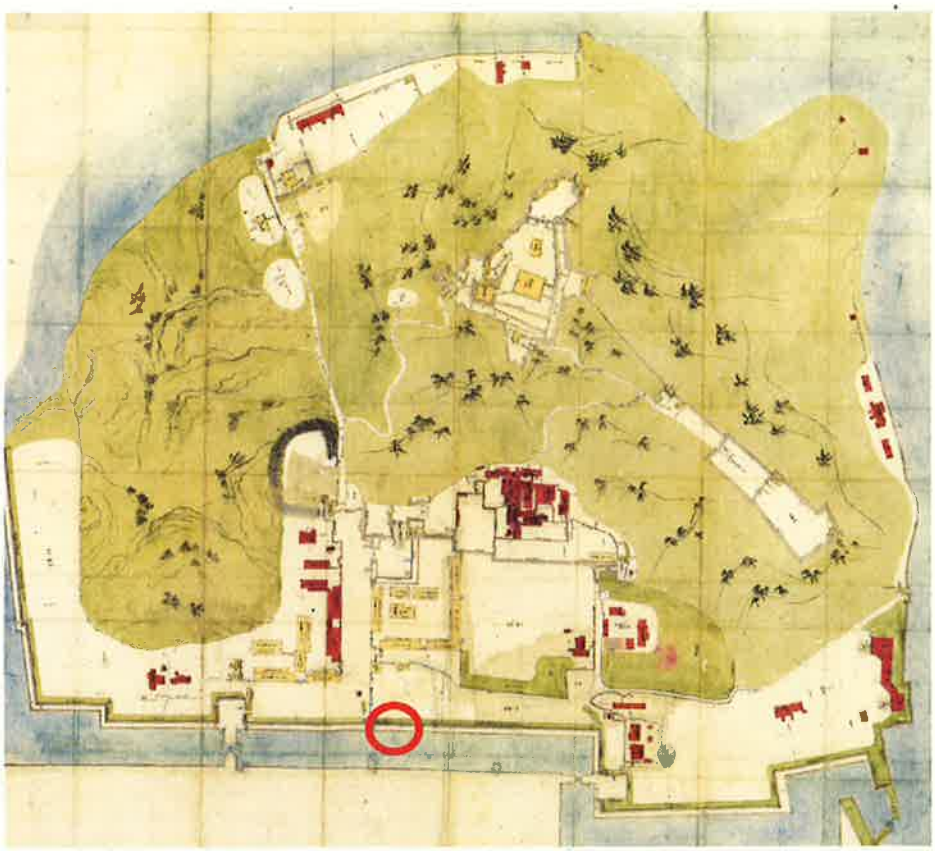


図１　「米子城平面図(江戸末期作成)」赤丸は調査地点。

図２　石列の検出状況(北西より)